

# 江戸時代の元曲辞典『劇語審譯』について

## —中国戯曲受容の視点から

岡 崎 由 美

### 1. はじめに

『劇語審譯』は、もっぱら元曲で用いられる演劇用語および元曲作品に出現する語彙を収録し、日本語による解釈を付したもので、江戸時代に編纂された唐話辞書の一種と見られている。

論者が確認した『劇語審譯』の現存テキストは以下の通りである。

①内閣文庫所蔵鈔本一冊（昌平坂学問所旧蔵と見られる幕府伝来本） 巻首題「劇語審譯」

「大学／蔵書」、「書籍／館印」、「浅草文庫」、「日本／政府／図書」の各蔵書印あり。昌平坂学問所の蔵書は、慶応4年（1868）4月に「大総督府」へ移管され、その後「昌平学校」—「大学校」—「大学」（明治2年12月～明治4年7月設置）へと所管が改められた。大学校、大学は文部省の前身機関であり、明治4年7月に文部省となった。書籍館（明治5年8月～明治7年7月）は文部省が昌平坂学問所跡地に開設した本邦初の公開図書館であり、さらに書籍館の蔵書を浅草に移して開設した官立図書館が浅草文庫（明治7年7月～明治14年5月）である。また、「日本／政府／図書」の蔵書印は、太政官文庫が内閣文庫に改称して後の明治19年2月から昭和7年まで使用された<sup>1)</sup>。

以下本論ではテキスト区別の便宜上、「昌平饗旧蔵本」と称す。

②内閣文庫所蔵鈔本一冊（内務省旧蔵本） 卷首題「劇語審譯」

「大日本／帝国／図書印」、「日本／政府／図書」、「明治十三年購求」の印記あり。「大日本／帝国／図書印」は、内務省図書局の蔵書印で、明治9年8月から明治15年6月まで使用された。

以下本論ではテキスト区別の便宜上、「内務省旧蔵本」と称す。

③東京大学東洋文化研究所所蔵鈔本一冊（倉石武四郎旧蔵本） 卷首題「劇語審譯」

倉石武四郎（1897-1975）の臥雲書庫旧蔵鈔本である。以下、本論では「倉石氏旧蔵本」と称す。この鈔本に拠って昭和15年に東方文化研究所より油印本が刊行された<sup>2)</sup>。この東方文化研究所は、東方文化学院京都研究所を前身として昭和13年（1938）に分離独立し、戦後に京都大学人文科学研究所に統合された東洋学・中国学の研究機関である。さらに昭和31年（1956）に京都大学東洋史研究室より前述の東方文化研究所油印本を覆印し、五十音順の語彙索引を付した版が発行されている。また、古典研究会編『唐話辞書類集』第四集（汲古書院、1971年）に内閣文庫所蔵本の覆印が収録されている。

これらを見る限り、『劇語審譯』は遅くとも幕末には編纂され、昌平坂学問所に所蔵されており、その書写も流布していたようである。これら以外に、別途鈔本が発見されても不思議ではあるまい。

なお、『唐話辞書類集』第四集所収の覆印版は、長澤規矩也による同書解題では内閣文庫所蔵鈔本二種のうちのどちらを底本にしたか明記せず、「一見佳と思はれるものを底本とした」とあるが、影印を見れば前述①昌

1) 以上の幕府伝来本の所管継承の経緯はすべて「特集 継承される記録—内閣文庫の古典籍・古文書—」（『国立公文書館ニュース』vol.10、2017年6月—8月）に拠る。

2) 同油印本見返しに「昭和十五年／東方文化研／究所借倉石／氏臥雲書庫／蔵寫本覆印」と記す。

平覺旧蔵と見られる幕府伝来本である。また、当該底本は「譯語の濁音の有無一定しないのみならず、半葉宛三箇所にて譯文の脱落があるので、昭和十五年京都の東方文化研究所（今の人文科学研究所）が倉石武四郎氏所蔵の寫本を底本として油印に付したものと對校し、…中略…又、譯文脱落部分は特に本文中に譯文を油印本によって挿入した」という（引用括弧内原注ママ）。さらに長澤氏は對校による頭注および「補正稿」を付している。即ち、『唐話辞書類集』所収の『劇語審譯』は単なる一底本の影印ではなく、長澤氏のかなりの補訂の手が加わったものである。

前掲各テキストの構成や相互の内容の対照は後述するが、このように『劇語審譯』は、必ずしも知られざる書物ではない。むしろ唐話辞書としては、かなり校訂整理の施された資料である。それゆえに一方で、本書は「雑劇の俗語を収録した唐話辞書」という看板の下に、近世白話の語彙資料という役割に落ちてしまっているようだ。近世中国語研究の分野において、本書に収録された特定の語彙と語積が資料として取り上げられることはまま見られるが、特に本書そのものが研究の対象となっているようにも見えない。

しかし、本書が元曲の用語・語彙に特化されているなら、その編纂には第一に元曲への関心があったことは言うを待たず、何に拠ってどのように元曲を理解しようとしたのか、という中国戯曲受容の足跡が反映されているはずである。いわば、『劇語審譯』の編纂者たちの中国戯曲閲読の実態を模索する手がかりである。そこで本論では江戸時代における中国古典戯曲受容の視点から、『劇語審譯』の成書について、その編集体裁、著録語彙、参考書等について、基礎的な考察を試みるものである。

以下、内閣文庫所蔵の昌平覺旧蔵本を底本に、内務省旧蔵本と倉石氏旧蔵本を適宜対照しつつ考察を進めていく。

## 2. 『劇語審譯』の編集構成

『劇語審譯』の内容は、おおむね二つの部分からなる。昌平覺旧藏鈔本でいえば、一つは巻首三葉ほどの部分に該当し、元曲の用語を解説する部分と、もう一つは雑劇作品に見られる白話語彙の解釈の部分である。用語の解説部分は、「第一折第二折」、「楔子」、「古門道」、「正旦」「正末」など基本用語二十四項目の見出し語と語釈に続き、〔明〕臧晋叔『元曲選』所収の「陶九成論曲」、「芝庵論曲」、「丹丘先生論曲」、「涵虛子論曲」をそれぞれ題記して原文を抜粋引用しつつ、雑劇の用語を解説するという方式を取る。「陶九成論曲」の引用では、書影1に見られる通り、原文の用語に対する解説部分を小字二行割注の形に加工して、見出し語となるべき用語を際立たせている。「陶九成論曲」の原文は、陶九成こと〔元〕陶宗儀の『南村輟耕録』巻二十五「院本名目」に見られるが、『元曲選』とは若干の異同があり、ここでは『元曲選』から引用したと判断される。

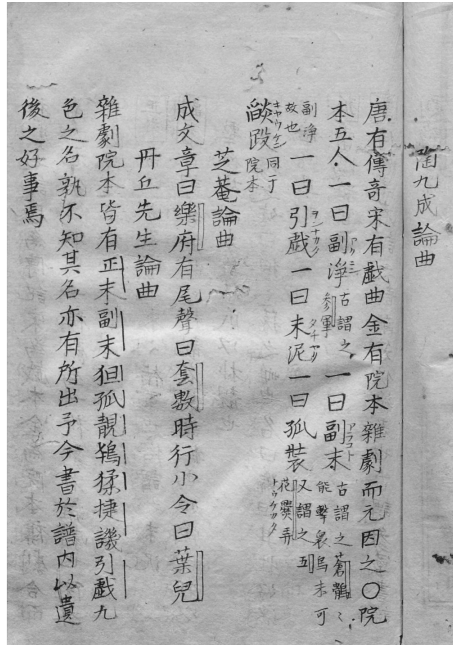
### 【南村輟耕録・卷二十五院本名目】

唐有傳奇、宋有戲曲、唱譚、詞說、金有院本、雜劇、諸宮調。院本、雜劇其實一也。國朝、院本、雜劇、始釐而二之。院本則五人、一曰副淨

…

### 【元曲選・陶九成論曲】

唐有傳奇、宋有戲曲、金有院本、雜劇、而元因之。然院本、雜劇釐而爲二矣。院本則五人、一曰副淨…



書影1 『劇語審譯』の各「論曲」引用部分

【劇語審譯】

唐有傳奇、宋有戲曲、金有院本、雜劇、而元因之○院本五人、一曰副淨…

一方、「丹丘先生論曲」の直接の引用は、以下に示す通り、明・朱権『太和正音譜』『詞林須知』の段から丸ごと拝借したものであり、版面の形式も『太和正音譜』の当該箇所を踏襲している。

【元曲選・丹丘先生論曲】

雜劇有正末、副末、獇、狐、靚、獇、獠、捷、譏、引戲九色之名。正末者、當場男子能指事者也。俗謂之末泥。副末執磕瓜以撲靚、即古所謂蒼

鶻是也。當場之妓曰狽、狽、猿之雌者也、其性好淫、今俗訛爲旦。……

【劇語審譯】（標点、傍線は本論者による）

雜劇院本皆有正末、副末、狽、狐、靚、鶻、猿、捷譏、引戲九色之名。  
孰不知其名、亦有所出。予今書於譜内、以遺後之好事焉。襍劇之說、唐  
爲傳記（ママ）、宋爲戲本（ママ）、金爲院本襍劇合而爲一、元分院本爲  
一、襍劇爲一。襍劇者雜劇（ママ）也。院本者行院之本也。

正末 當場男子謂之末。末指事也。俗謂之末泥。

副末 古謂蒼鶻、故可朴（ママ）靚者。靚謂狐也。如鶻之可以擊狐、故  
副末執磬瓜以朴（ママ）靚也。

狽 當場之妓曰狽。狽猿之雌也、名曰狽狽、其性好淫。俗呼旦、非也。

……

【太和正音譜・詞林須知】（嘯餘譜本）

丹丘先生曰、雜劇院本皆有正末、副末、狽、狐、靚、鶻、猿、捷譏、  
引戲九色之名。孰不知其名、亦有所出。予今書於譜内、以遺後之好事焉。  
雜劇之說、唐爲傳奇。宋爲戲文。金爲院本雜劇合而爲一。元分院本爲一。  
雜劇爲一。襍劇者雜戲也。院本者行院之本也。

正末 當場男子謂之末。末、指事也。俗謂之末泥。

副末 古謂蒼鶻、故可朴靚者。靚謂狐也。如鶻之可以擊狐、故副末執磬  
瓜以朴靚是也。

狽 當場之妓曰狽。狽猿之雌也、名曰狽狽、其性好淫。俗呼旦、非也。

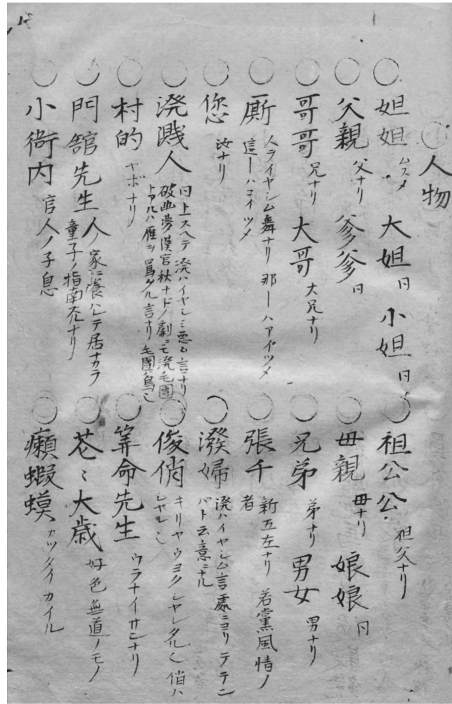
……

『太和正音譜』の版本は複数あるが、傍点を付した文字は『嘯餘譜』所  
収本に見られる表記の特徴であり、『劇語審譯』が参照した版本はこれで

あると思う。『劇語審譯』は『元曲選』所収の各「論曲」をまとめてとりあげていることや、収録された白話語彙のほとんどが『元曲選』所収の雑劇作品に出典を求めることが可能であることから、編者が『元曲選』を主要な資料としていたことは間違いないが、個別の引用元となると前掲のように他の資料が用いられることもある。なお、前掲の傍線を付した部分は、内務省旧蔵本と倉石氏旧蔵本では削除されており、『太和正音譜』における正末、副末、狹、孤、靚、鶯、猿、捷譏、引戯および鬼門道の各見出し語とその語釈のみを残す。いわば、より辞書的な体裁になっているといえる。

「芝庵論曲」では、「成文章曰樂府、有尾聲曰套數、時行小令曰葉兒」の一行が引用されるのみであるが、「涵虛子論曲」の後に「停聲 待拍 偷吹 拽棒 字真 句篤 依腔 貼調 以上節奏ノ名目拍子ツケ」といった記載があり、これは「芝庵論曲」の「凡歌之節奏、有停聲、有待拍、有偷吹、有拽棒、有字真、有句篤、有依腔、有貼調」とあるのから見出し語を追加抽出して日本語で語釈をつけたものである。同様に「涵虛子論曲」の「凡歌一聲、聲有四節、曰起床、曰過度、曰搵簪、曰擲落」に対して、「起床過度 搵簪擲落 以上聲ノ名目章ヲサスコトノ名目」、「凡歌一句、句有聲韻、一聲平、一聲背、一聲圓」に対して、「聲平 聲背 聲圓 節ナリ」と記載する。中国語原文から、解釈すべき用語を抽出し、見出し語として並べていく編集のプロセスが見て取れる。

さて、こうして五十項目程度の元曲基本用語を挙げたのち、紙幅の大半は雑劇作品の中に現れる白話語彙の解釈が中心となる。抽出された語彙は、「人物」「支体」「動容」「居処 山川 草木 天象」「衣食 器財」「助辞発語」「雑辞」の七つの部門に分けて収録されている。版面は半葉およそ十行、上下二段組で、見出し語は白丸を付して配列し、語釈は小字二行の



書影 2 昌平變旧蔵本

割注の形式で配される（書影 2 参照）。

見出し語には「〇姐姐<sup>ムスメ</sup> 大姐<sup>同</sup> 小姐<sup>同</sup>」の如く、類語を列举したものもあるが、白丸を付したものが見出し語として立っていることは明らかである。これに基づき、白丸を冠した見出し語（フレーズや文も含む）の件数を確認すると以下の表の通りとなる。

見出し語の件数は、三種の鈔本間で異同があるが、件数増減の要因の一つは、書写の際に二つの見出し語を一語と判断したり、見出し語と語釈を混同したりするなど見出し語認定の違い、もう一つは新たな見出し語を増



分類	見出し語件数
人物	182
支体	40
動容	47
居処 山川 草木 天象	67
衣食 器財	154
助辞 発語	61
雑辞	530
	計 1081 件

補する場合である。例えば前者の場合、2件の見出し語を1件と混同する例は以下のようなものがある。

【昌平覺旧蔵本】(6葉裏)

- 燒火打水的 メシタキ
- 娃娃 アカ子ナリ
- 虔婆 ヲフクロ
- 乾爹 (語積脱落)
- 剪絡 巾着切り

【内務省旧蔵本】

- 燒火打水的 メシタキ
- 娃娃 赤子也
- 虔婆 ヲフクロ
- 乾爹 (語積脱落)
- 剪絡 巾着切レ

## 【倉石氏旧蔵本】

- 焼火打水<sup>メシタキ</sup>的娃娃 赤子
- 虔婆 親分ヲフクロ
- 乾爹剪緋 巾着切

倉石氏旧蔵本はこの他にも、見出し語の混同や脱誤、語釈の混入が見られるが、一方で昌平覺旧蔵本の誤字を修正したり、昌平覺旧蔵本および内務省旧蔵本の語釈の脱落部分を補っているところもあるのは、長澤氏がその油印本に対して述べる通りである<sup>3)</sup>。

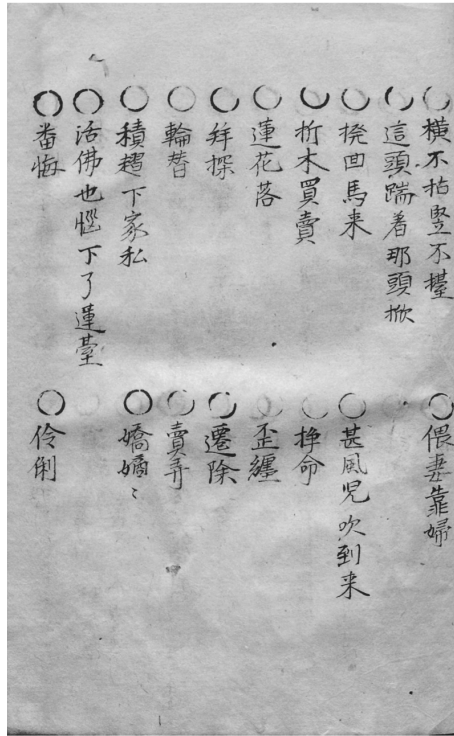
見出し語の増補としては、内務省旧蔵本ではさほど多くなく、昌平覺旧蔵本に対して、五、六件の新たな語彙が加えられているが、眉注や欄外に書き込まれており、見出し語を増補再編するという発想ではなく、覚え書きを加えたという体に見える。

一方、倉石氏旧蔵本の方は、昌平覺旧蔵本に見られない25件ほどの新たな語彙を含んで見出し語の配列が再編されており、意識的な補訂編集が行われたことがわかる。この補訂作業の詳細は次章で詳述する。

### 3. 鈔本の形成と流布

現在確認されるこの三種類の鈔本であるが、その相互関係を考えることは、総体としての『劇語審譯』の形成と書写による流布の実態を追う手掛かりとなる。見出し語や語釈の典拠は何か。書写の間に、見出し語や語釈の継承や改編はどう行われているのか。そういったことを、鈔本の流布から考えてみたい。

3) 『唐話辞書類集』第四集（汲古書院、1971年）「解説」。「油印本は首の部分に脱落があり、注文が本文に混入し、脱誤も多いが、この底本を訂補するに足りるものもある。」



書影3 『劇語審譯』昌平夔旧蔵本  
第二十八葉表の語釈脱落部分

### 3-1. 語釈の脱落

まず、この三種の鈔本の成立の順序を考える手掛かりになるのは、語釈の脱落部分である。昌平夔旧蔵本には、半葉宛三箇所にて語釈の脱落がある。見出し語だけがあって、語釈がないのである。26葉表、28葉表、31葉表の三箇所、いずれも「雑辞」の部門に該当する。この語釈の脱落は、後から語釈を書き入れる予定で見出し語のみ配列しておいたためと見られる。なぜなら、見出し語が長句の場合、あらかじめ二段組の下段に次の見出し語を入れず、語釈を書き入れる十分な余白を取ろうとしているからである。

## 【28 葉表の語釈補訂一覧】

見出し語	内務省旧蔵本	倉石氏旧蔵本
横不拈豎不擡	タテノ物ヲヨコニセヌ	横ノ物ヲ豎ニモセヌ
俛妻靠婦	女房ニスゴサル	女房ニスゴサレル
這頭踰着那頭掀	コチラヘフメバアチラカヒツクリカヘル	コチラヲフメバアチラガヒツクリカエル
撥回馬來	馬ヲヒツクリカヘス	馬ヲヒツクリカエス
甚風兒吹到來	トツチ風カ吹テ御出ソ	トツチ風カ吹テ御出ソ
折本 <sup>4)</sup> 買賣	本ノヒケルアキナイ	本ノヒケルアキナイ
掙命	命ヲステル	命ヲ捨ル
蓮花落	謡ノ名也物モライナトノウタウ歌也	謡ノ名、物モライナト謡フ歌ナリ
歪纏	シタ、ルクツキマトウ	シタ、ルクツキマトウ
拜探	御尋ヲ申ス	御尋申ス
遷除	役替	役替
輪替	代り番スルコト	代り番ニスルコト
賣弄	ゼイヲ云フ	ゼイヲ云フ
積趨下家私	金ヲタメル	金ヲタメル
嬌嬌嬌	ウツクシク生ニスル	ウツクシク生々スル
活佛也惱下了蓮臺	佛モコラヘル	佛モコラエヌ
翻悔	後悔スルコト	後悔スルコト
伶俐	サツパリトシタコト	サツハリトシタコト

書影3の2行目「這頭踰着那頭掀」の下の余白、9行目「活佛也惱下了蓮臺」が、それである。

この脱落部分は、内務省旧蔵本と倉石氏旧蔵本では補われており、文言

4) 昌平夔旧蔵本では「折木」と誤記されているが、「本」とすべき。内務省旧蔵本、倉石氏旧蔵本では「本」に修訂されている。

もほぼ同一である。以下、脱落部分に対する補訂の一部を対照表にして示す。内務省旧蔵本と倉石氏旧蔵本では、見出し語の配列順が些か異なるのだが、ここでは語釈の文言の対照を主眼として、昌平覺本の配列に合わせて対照する。ちなみに配列の異なる部分は、書影3の一行目下段「佞妻靠婦」「這頭踹着那頭掀」の配列順が入れ替わっており、語釈を含めて余白なしで続けて記載されている。

以上の通り、昌平覺旧蔵本は語釈を充当中の未完稿であり、まず先に見出し語を選定して配列しておき、語釈を検討していたプロセスが見て取れる。ちなみに表中の、「横不拈豎不擡」「佞妻靠婦」「這頭踹着那頭掀」「撥回馬來」はいずれも『朱太守風雪漁樵記』雑劇に用例が見られることから、他にも用例があるにせよ、『漁樵記』から一括して抽出してきたものと推定される。

横不拈豎不擡：『漁樵記』第二折「你毎日家横不拈豎不擡。(お前は日々縦のものを横にもしない)」

佞妻靠婦：『漁樵記』楔子「那裏是真個問他索休書。因爲他佞妻靠婦。不肯進取功名。(本当に離縁状を出せと頼めるものかね。あの人は女房に未練たらたらで、出世はそっちのけなんだ)」

這頭踹着那頭掀：『漁樵記』第二折「你做那桑木官。柳木官。這頭踹着那頭掀。(あんたがその桑木官(棺)だの柳木官(棺)になったら、こっちを踏んづけりゃあっちがひっくり返るってもんでしょ)」

撥回馬來：『漁樵記』第三折「老漢挑起擔兒。恰待要走。則見那相公滴溜的撥回馬來。(荷物を担いで、いざ行こうとしたら、あれあれ旦那様がさっさと馬を取って返したぞ)」

## ①昌平饗旧蔵本のみ異なる例（昌平饗旧蔵本の葉数を揭示する）

葉数	昌平饗旧蔵本	内務省旧蔵本	倉石氏旧蔵本
12 葉裏	對門	<u>隔壁</u>	<u>隔壁</u>
12 葉裏	斜對門	對門	對門
12 葉裏	<u>隔壁</u>	斜對門	斜對門
12 葉裏	花對子	花對子	花栽子

## ②倉石氏旧蔵本のみ異なる例（昌平饗旧蔵本の葉数を揭示する）

葉数	昌平饗旧蔵本	内務省旧蔵本	倉石氏旧蔵本
13 葉表	山團標	山團標	山團標
13 葉表	<u>打家劫舍盜人</u>	<u>打家劫舍盜人</u>	<u>(脱落)</u>
13 葉表	花衛衛	花衛衛	花衛衛
13 葉表	<u>熟食店</u>	<u>熟食店</u>	間壁
13 葉表	間壁	間壁	雲陽市
13 葉表	雲陽市	雲陽市	一料樹
13 葉表	一料樹	一料樹	<u>熟食店</u>

## 3-2. 見出し語の配列

さて、鈔本の成立を考える次の手掛かりは、見出し語の配列順の継承である。見出し語の配列順が変更されるのは、意図的な配列の再編の場合もあれば、書写の際の見落としや誤写の場合もある。鈔本三種を比較した場合、①内務省旧蔵本と倉石氏旧蔵本が同じで、昌平饗旧蔵本と異なる場合、②昌平饗旧蔵本と内務省旧蔵本が同じで、倉石氏旧蔵本のみ異なる場合のいずれかである。

この①と②の例は、ほぼ同数例見受けられるが、見出し語の配列に関して、昌平饗旧蔵本に対する内務省旧蔵本の変更箇所は、倉石氏旧蔵本に継承されていること、そして、内務省旧蔵本のみ配列が異なるという事例が見られないことから、鈔本の成立は昌平饗旧蔵本が最も早く、次が語積の

脱落部分を補った内務省旧蔵本となり、この版次を踏まえた後発の書写本が倉石氏旧蔵本と考えられる。

### 3-3. 見出し語の増補

前章において、内務省旧蔵本には若干の新たな語彙の増補があるが、それはほとんど覚え書きのレベルであると述べた。ここでもう少し踏み込んで、内務省旧蔵本の書き入れについて、見出し語の増補編集という見地から見てみたい。

内務省旧蔵本には以下のような書き入れと、語彙の増補がある。

①第5葉裏の眉注に「○小官 カゲマ」「○扒頭 カゲマノ年長タルモノ」との書入れ。

雑劇に「小官」の語は用例極めて多いものの、ほぼ全て「官僚の謙遜した自称」の意味で用いられており、「男妓」の意味での用例は確認できていない。小説『龍陽逸史』第十八回に、「廣陽城中單單剩下一個小官、名叫葛妙兒、年約二十五、六歳、還是個扒頭、只是未有個大老相處。(広陽城中にただ一人だけ葛妙兒という名の陰間が残っている。年のころは二十五、六歳で、まあトウは立っているが、まだ兄貴分の相方はいない)」との用例が最も適切であろうと思われる。

②第11葉表「淨手 大小便ノコト」の下に朱筆で「見風 貴人ノ前ナドニテ大小便ニ行クヲ——ト云」と書き入れ。

これは、見出し語の追加というよりは、「淨手」の語釈の一環として類語を加えたと見るべきであろう。

③第11葉表末尾余白に朱筆で「乞頭 博チノソバニ居テ勝者ニ就テ錢ヲ

乞ヲ乞頭ト云夷堅志」と書き入れ。

『夷堅丁志』卷一「夏氏骰子」に「夏塵、字幾道、衛州汲縣人。崇寧大觀間、居太學甚久、未成名。家故貧、至無一錢。同舍生或相聚博戲、則袖手傍觀、時從勝者覓錙銖、俗謂之乞頭是也。(夏塵、字は幾道、衛州汲縣の人である。崇寧から大觀になるころ、太学に長々と居座っていたものの、名を成さなかった。ゆえに家は貧しく、一文の錢もなかった。同学が集まって博奕をしていると、自分は加わずに傍觀し、時に勝ったものにビタ錢をねだった。俗にそれを乞頭というのだ)」とあり、この解釈を引いたものであるが、「乞頭」の雜劇における用例は未見。待考。

④第 15 葉裏「○横財」と「○將酒來與作你盪寒」の間に「○包袱 風呂敷也」を挿入。

昌平鬻旧蔵本には見られなかったもので、見出し語の配列補訂ということになる。これは倉石氏旧蔵本にも同じ個所に「○包袱 風呂シキ」と記載されている。

⑤第 20 葉表末尾余白に「報君知 賣卜先生手中所執者也」との書き入れ。

以上を見ると、内務省旧蔵本の余白書き入れについては、当該鈔本独自のもので、他に転記はされなかったようであるが、④の「○包袱 風呂敷也」については見出し語本文の再編という形で組み込まれていたため、倉石氏旧蔵本のような他の書写本にも転記されたようである。

このように、語釈が大量に脱落している昌平鬻旧蔵本はやはり未完成稿であり、完全ではないにせよその不足を補訂した内務省旧蔵本のバージョンが、書写されて流布する対象となったと見られる。



## 4. 『劇語審譯』編纂の典拠・来源

以下は、『劇語審譯』の見出し語の引用元や語釈の典拠など、本文中に書名が提示されたものを取り上げ、編纂者の中国戯曲閲読の足跡を見てみたい。

### 4-1. 雑劇作品

『劇語審譯』に収録された語彙の大半が『元曲選』所収の雑劇に用例を求められることはすでに述べた。本書の編纂にあたって『元曲選』が主たる資料であったことは間違いない。

我が国への『元曲選』の舶来は、明確に記録に残っているところでは、『商舶載来書目』における宝暦12年(1762)の「元人百種 一部六套」である<sup>5)</sup>。

これに比べると、明雑劇集の方が舶来の記録は古く、『舶載書目』、『商舶載来書目』に記載された元禄7年(1694)「名家雑劇 一部十本」の舶来であろう<sup>6)</sup>。本論文執筆段階では、『劇語審譯』中、元雑劇に出典を確認できなかった語彙のうち、明雑劇に用例が確認できたケースもあるので、今後さらに広く出典調査が必要であろう。また、元雑劇の選集といえば、『商舶載来書目』に、元文5年(1740)「古雑劇 一部八本」舶来の記載がある。『古雑劇』は〔明〕王驥徳の編とされる元雑劇選集である。

『劇語審譯』の本文中に書名が提示された雑劇作品もある。昌平覺旧蔵本第5葉「潑濺人」の語釈に「同上スヘテ潑ハイヤシミ悪ム言ナリ破幽夢

5) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所、1967年)、井上泰山『元雑劇の伝来と受容に関する覚書』(『中文研究集刊』1、1988年)、伴俊典『江戸期における中国古典戯曲書の将来』(『早稲田大学文学研究科紀要』第2分冊第57集、2011年)

6) 伴俊典(2011)。前注同。

漢宮秋ナドノ劇ニモ潑毛團トアルハ雁ヲ罵ケル言ナリ毛團鳥也」とある。「潑毛團」の語彙は『元曲選』所収『破幽夢孤雁漢宮秋』雜劇第四折に用例が見られる<sup>7)</sup>。

○〔雁叫科〕〔云〕則被那潑毛團叫的悽楚人也。(あの嫌な鳥に心を引き裂かれる)

○【么篇】你却待尋子卿。覓李陵。對着銀臺。叫醒咱家。對影生情。則俺那遠鄉的。漢明妃。雖然得命。不見你個潑毛團也耳根清淨。(お前は蘇武か李陵を捜せばよいものを、銀台に向かい、私を呼び覚まし、ゆらぐ影にも思いがつのる。私は故郷を遠く離れた漢の明妃、幸薄い身とはいえど、お前のような嫌な鳥を見なければ、心を悩ませることもあるまいに)

また、第6葉表「五個指頭」の語釈には「救風塵ノ劇」と典拠を示す。この「五個指頭」の一つ前の見出し語は「手模印」であるが、この二語は『救風塵』雜劇第四折で連続して用いられている。

○〔周舍云〕休書上手模印五個指頭。那裏四個指頭的是休書。(離縁状には五本指のツメ印を押すもの。四本指で離縁状になるものか)

#### 4-2. 曲譜・曲論

巻頭の元曲用語解説の部分で、「楔子」の語釈に「狂言ノ終マテノ仕組ヲ此ニテ知ラスル也狂言ノ楔(クサビ)ニナル云楔子ト云間情偶寄ニ笠翁

7) 他に、『御梅香』第三折「唾。鰐膠粘住你哩。潑毛團好無禮也。』『張天師』第二折「釘子釘着你哩。潑毛團是好無禮也。」など用例がある。

カ——ノ詩ヲ作シト云コトハ一部ノ狂言ヲ絶句一首ニ作りヲラセネハナラヌ故ナリ」とある<sup>8)</sup>。李漁は江戸中期以降、小説、戯曲、随筆、画譜画論などがそのライフスタイルも含め、中国の文人趣味の代表とも言える人気を以て、本邦の文化人に愛好された<sup>9)</sup>。李漁の著作『閒情偶寄』は、『商舶載来書目』に享保4年(1719)に舶来の記載が見える。李漁の小説や戯曲の流入はかなり早く、元禄年間には、『無声戯』、『連城壁』、『李笠翁伝奇十種』(笠翁十種曲)といった作品が舶載されていた。『劇語審譯』で語釈に援用したのは、『閒情偶寄』巻之三「詞曲部・格曲第六・家門」の「元詞開場、止有冒頭數語、謂之正名、又曰楔子、多則四句、少則二句、似爲簡捷。」の段であろうと考えられる。

次に、「丹丘先生論曲」の引用元となった『太和正音譜』については、『嘯餘譜』本が底本としたいが、『舶載書目』の元禄15年(1702)の条に「嘯餘譜 二十四本」の記載がある。また別に、内閣文庫に豊後佐伯藩主毛利高標献上本である明刊本が所蔵されている<sup>10)</sup>。毛利高標(1755-1801)は、好学にして藩の教育振興にも努め、天明元年(1781)に蔵書八万卷といわれる佐伯文庫を創設したことで知られる。没後、蔵書の一部は幕府に献納された<sup>11)</sup>。本書もそれに含まれ、昌平饗を経て内閣文庫の所管となったものである。

#### 4-3. その他

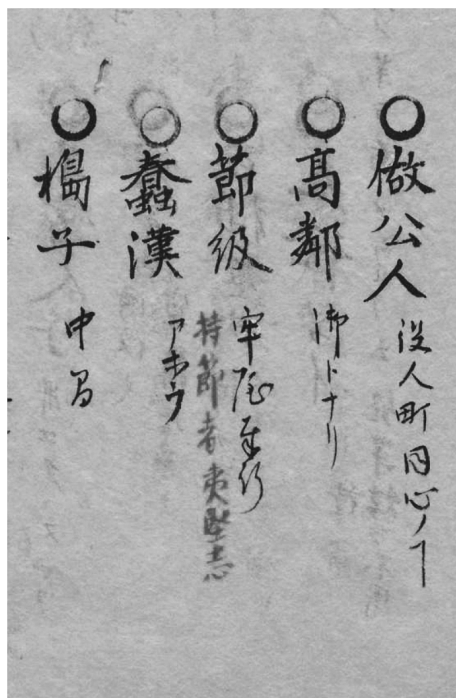
内務省旧蔵本には、前述した通り独自の書き入れがあるが、「乞頭」の語釈以外に、朱筆で「夷堅志」と書き入れた箇所がもう一箇所ある。内

8) 昌平饗旧蔵本第1葉表。

9) 吉田恵理「江戸中期の李漁(李笠翁)イメージに関する一考察」(『学習院大学』人文科学論集Ⅷ、1999年)

10) 社雪「日本内閣文庫蔵明刊『太和正音譜』考」(『戯曲と俗文学研究』2019年第1期)

11) 梅木幸吉『佐伯文庫の研究』(1979年、実費頒布)



書影4 内務省旧蔵本  
第9葉表

務省旧蔵本第九葉表に「節級 牢屋奉行」と墨書した脇に朱筆で「持節者夷堅志」と書き入れがある（書影4）。「節級」の用例は、『夷堅乙志』中に三箇所見られる。

『夷堅乙志』卷二「人化犬」：又節級徐忠、因病亦生一尾。（また節級の徐忠も病気で尻尾が生えた。）

『夷堅乙志』卷十二「肇慶土偶」：次夕又如是、遂賂掌宿節級、求專値

三更、所獲益富、逾兩月矣。(翌日の夜もこの通りだったので、宿直を担当する節級に袖の下を渡して、もっぱら真夜中に当直をさせてもらい、ますます懐が豊かになって二か月が過ぎた。)

『夷堅乙志』卷十九「賈成之」：遂得病、時時拊膺曰、節級緩縛我、待教授來、我即去。越三日死。(そこで病になり、しばしば悲憤に胸を叩き、「節級が私を縛るのを少し遅らせているが、学官が来たら、すぐに行くのだ」と言っていたが、三日後に死んだ。)

『夷堅志』を取り上げているのは、内務省旧蔵本の書き入れのみであり、この校訂者は、『夷堅志』をよく読んでいたようである。

昌平鬻旧蔵本第第13葉表「花衞衞」の語釈には、「五雜俎曰、閩中方言、家中小巷謂之弄。南史、東昏侯遇戮于西弄、即巷也。元徑世大典謂之衞。花衞衞ハ花見處、酒衞衞ハ酒アル處ナリ。胡同ハ道也今京師訛爲衞衞」とある。これは〔明〕謝肇淛『五雜俎』卷三から引用したものである。

閩中方言、家中小巷謂之弄。『南史』東昏侯遇弑於西弄、弄即巷也。元『經世大典』謂之火弄。今京師訛爲胡同。(閩中の方言に家中小巷を弄という。『南史』に東昏侯が西弄で弑されたという弄は即ち巷のことである。元の『經世大典』ではこれを火弄といい、今の京師ではこれを訛って胡同という。)

「花衞衞ハ花見處、酒衞衞ハ酒アル處ナリ」とは、花は花でも物言う花、妓女のいるところ、即ち妓院、妓楼という意味であるが、それはむろん、『揚州夢』や『玉壺春』、『誤入桃源』といった花柳界ものに用いられる語彙ということを知った上でのことであろう。

《揚州夢》第四折：但説着花術術我可早願道鞭鐙。(花のちまたといえ  
ば、私は早くも鞭に任せて駆け付けたいと思っていた。)

《玉壺春》第二折：我是個翠紅堆傅粉的何郎。花術術畫眉的張敞。(私  
は着飾って脂粉に埋もれた何晏、花のちまたで美女の眉を描く張敞  
だ。)

《誤入桃源》第二折：沒揣的撞到風流陣。引入花術術。擺列着金釵十  
二行。敢則夢上他巫山十二峯。(思いもよらず風流陣に出くわし、花  
のちまたに引き入れられた。ずらりと居並ぶ美女たち、まさに巫山十  
二峰の逢瀬を夢見るといもの)

実は、『劇語審譯』の語彙の出典について、本稿3-3で些か触れた通り、  
小説の語彙も混じっているのではないか、と思われる。昌平饗旧蔵本第  
33葉表「騙了的」の語釈に「陰莖ヲキルコト 西遊記ニミエタリ」とい  
う。該当の用例は、『西遊記』第三十九回「点汚他不得、他是个骗了的狮  
子。(あやつは他人を穢すことはできぬのだ。去勢された獅子だからな)」  
というくだりであろう。ただし、この語彙を戯曲作品で用いている例はま  
だ確認できていない。『劇語審譯』の「支体」部門の末尾、昌平饗旧蔵本  
第10葉裏には性器に関する様々な俗称が集められている。これらの俗称  
は、沢田一斎(1701-1782)編とされる『俗語解』附録「閩風名色」収録  
の語彙と重なる。「閩風名色」において、これら『劇語審譯』と一致する  
俗語群の出典は、『龍陽逸史』や『肉蒲團』など小説ばかりである。『劇語  
審譯』が、先行する唐話辞書を参照し、小説語彙を導入したことも考えら  
れる。

最後に昌平饗旧蔵本第33葉裏「羞明」の語釈に「夜降雪此ノ語東坡ニ  
モ用」とあり、他二種の鈔本でも「夜降雪此ノ語東坡カ詩ニモ用」(内務  
省旧蔵本)、「夜降雪此語東坡ノ詩ニモ用タリ」(倉石氏旧蔵本)とするが、

蘇軾の詩に「羞明」の語の用例が見当たらない。〔元〕陳秀明『東坡詩話録』巻下に、

王君玉謂人曰、詩家不妨閒用俗語、尤見工夫。雪止未消者、俗謂之待伴。嘗有雪詩、「待伴不禁鴛瓦冷、羞明當怯玉鉤寒」。待伴、羞明皆俗語、而採拾入句、了無痕類、此點瓦礫爲黃金手也。(王君玉が人に「詩人は俗語を交えて使ってもよい。そこに最も工夫が現れる」と語った。雪が止んでまだ溶けていない様を俗に待伴という。かつて雪の詩に「待伴禁ぜず鴛瓦の冷たきを、羞明まさに怯ゆべし玉鉤の寒きを」との句がある。待伴、羞明はみな俗語であるが、これを拾って句に入れ、みじんも後を残さない。これは瓦を黄金に変える手並みである。)

とあるが、これは〔宋〕魏慶之『詩人玉屑』巻六からの引用である。昌平覺旧蔵本で「東坡ニモ用」と記したのは、あるいは『東坡詩話録』にも引用されていることを指したのだろうか。なお、「羞明」についても雑劇での用例は未確認である。これもさらに調査したい。

## 五. おわりに

以上のように、『劇語審譯』は、唐話辞書ではあるけれども、むしろ江戸時代における文化人もしくは学者が、中国戯曲を受容した痕跡を提供してくれる資料である。江戸期の中国演劇の受容は、長崎唐人屋敷での舞台上演に接するか、あるいは戯曲文学として書物で接するか、比較的明確に分かれていた。前者は長崎の遊郭や芸妓、芸人を媒介として、もっぱら花部乱弾の音楽が伝えられた。一方、後者は元雑劇や明清の伝奇などいわゆ

る古典戯曲の書物が舶載され、レーゼドラマのように享受された<sup>12)</sup>。これは戯曲知識に関する情報の形態も異なった。例えば『崎港聞見録』も唐話辞書の一種で、もっぱら船舶航行、荷揚げや税関の用語、貿易品であろう海産物や織物、食品の名称など、長崎に来航する中国人との実用会話を想定した語彙集であるが、中国人とのコミュニケーションを図るためにか、節句の祭りや娯楽など文化的語彙も含んでいる。その中には芝居の用語もある（書影5）。原本でのルビは以下に（ ）で示す。

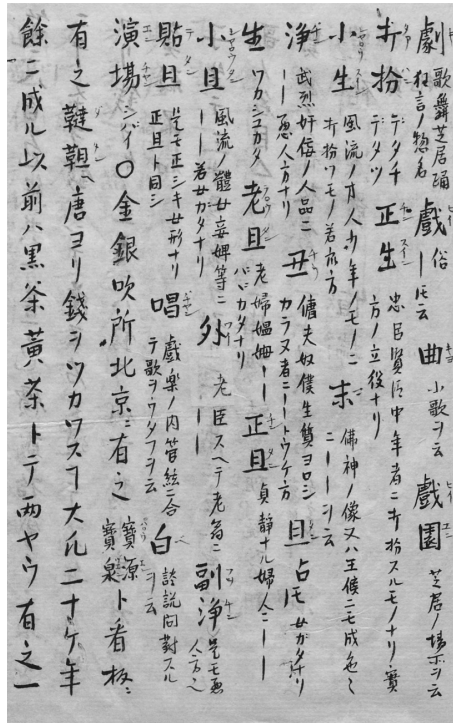
劇（キ） 歌舞芝居踊狂言ノ惣名 戯（ヒイ） 俗——トモ云  
 曲（キョ） 小歌ヲ云  
 戲園（ヒイユン） 芝居ノ場所ヲ云  
 打扮（タアハン） デタチ デタツ  
 正生（チンスイン） 忠臣賢臣中年者ニ打扮スルモノナリ實方の立役ナリ

といった辞書仕立てで語釈が加えられているが、これらは中国語音が付されている通り、中国人か、あるいは唐通事にインタビューして得た知識であろう。だからこそ、書名も「聞見録」なのである。ここで解説されるのは、むしろ、元雑劇や明伝奇ではなく、同時代の中国人が享受している演劇である。

狂言仕組浄瑠璃之類、大凡百通りモ有之。昆腔（クンキャン）高腔（カ〇ウキャン）四平腔（スウヒンキャン）ナトノ若別アリ當世ハヤリシハ  
 満床（マアンシャン）笏 漁家樂（イユイキヤウロ） 雙珠記（シャンチュイキイ）

12) 岡崎由美「江戸時代日本接受中国戯曲概況—聴戲与読曲」（『海内外中国戯劇史家自選集 福満正博・岡崎由美巻』（鄭州：大象出版社、2018年）





書影5 『崎港聞見録』  
中国演劇語彙部分

叙事記 (ジュイスウキイ) 琵琶 (パア) 記 西廟 (シイミヤ〇ウ) 記  
西楼 (シイレ〇ウ) 記 十五貫 (ジウ・クハン) 虎符記 (フウフウキイ)  
精忠譜 (チンチョンブウ) 八義記 (パニイキイ) 金釵記 (キンサキイ)  
等ナリ

このように江戸の昌平覺で受容されている中国演劇と長崎で受容されて  
いる中国演劇は、受容の対象も、経路や方式も全く異なる。『劇語審譯』  
は、まさに中国戯曲を読むための辞書であり、その編纂のプロセスにおい

て「読曲」が江戸時代の日本でどのように行われたのか、その実態をつかむ少なからぬ手掛かりを提供してくれるものである。